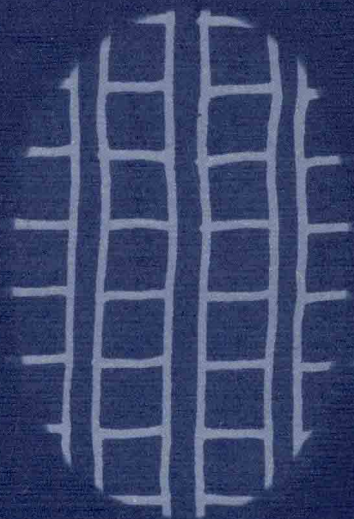


# 群馬の現代小説



みやま文庫

# 群馬の現代小説

みやま文庫

群馬の現代小説 (みやま文庫74)

昭和54年 6 月 1 日印刷

会員頒布 (会費年間2,800円)

昭和54年 6 月10日発行

編 集 者

み や ま 文 庫 編 集 部

発行者代表

桑 島 新 一 郎

印 刷 者

開 文 社 印 刷 所

発 行 所

み や ま 文 庫

☎371

前橋市日吉町一丁目14-8  
群 馬 県 立 図 書 館 内

昭和54年度第1回配本

## まえがき

群馬県文学賞が設けられたのは、昭和三十八年からである。昨年の昭和五十三度をもって十六回を重ねたことになる。毎年七部門（短歌、俳句、詩、小説、評論、随筆、児童文学）で授賞するので、過去十六年間の受賞者の数は、百名をこえる。この文学賞の趣旨は、新人発掘ということにあるが、どの部門も、該当期間一年間の発表活動の中から、各部門五名ないし八名の選考委員によって厳選されるから、相当の文学経歴をもつ者が受賞するケースが多く、したがって、その受賞作品は、本県における文学活動の高い水準を示すものと考えて差しつかえない。その成果は、毎年刊行される『群馬県文学賞作品集』に収められていて、私たちはそこに、本県の現代文学の動きを鮮明にくみとることができる。それだけに、この『群馬県文学賞作品集』各巻は、昭和三十八年という時点からの、本県文学史を組み立てるための貴重な資料といえるだろう。ただ惜しむらくは、この作品集は、県内ひろくゆきわたるまでに至っていないため、多くの人の眼にふれることが少ない。

本文庫では、すでに近代文学に関するものを何冊かとりあげてきた。しかし、現代文学の分野としては『みやま随筆』が一冊あるのみである。本文庫が、本県の歴史と風土とを幅ひろくテーマとしてとりあげる場合、やはり現代に生きる文化の一面も、その内容とする必要があることは言うまでもない。文学も、もちろんその中に含まれる。

明治以降、本県の文学の主流は、どちらかというところ、詩、俳句、短歌におかれてきた。しかし。小説の分野にも、脈々たる流れは続いていたのである。ただ、県内に、その発表の場があまりにも少なかった。戦後になって、文学の諸分野に自由な発表の場がつくられるに及んで、県内での小説の創作活動は生気をとりもどし、わけても、桐生市に移り住んだ南川潤、坂口安吾の二作家は、県内の多くの若い作家に影響を与えた。その後、各地に小説の発表活動がさかんになり、その動きは、県文学賞や上毛文学賞（上毛新聞社主催）が設けられたことにより、いっそう活発となったといっても過言ではない。

今回、本文庫がとりあげた『群馬の現代小説』は、右のような経緯の中で、県文学賞制定以後という限られた時期ではあるが、本県の小説の動きを、県文学賞受賞作を通じて辿ろうとするものである。ただ、ページ数の関係もあって、第一回から第十回までの十年間の作品にとどめた。なお、所収作品の鑑賞と本県小説界の動向についての理解に役立つように、巻末に、県文学賞選考委員（小説部門）の浅田晃彦、江口恭平両氏による解説を付した。

みやま文庫事務局長 関

俊 治

|  |  |  |    |  |  |  |
|--|--|--|----|--|--|--|
|  |  |  | 目次 |  |  |  |
|--|--|--|----|--|--|--|

|  |      |  |  |  |  |  |
|--|------|--|--|--|--|--|
|  | まえがき |  |  |  |  |  |
|--|------|--|--|--|--|--|

蛭つ田

萩原博志 1

地芝風土記

斎藤正道 27

岩宿遺跡

岩武都 53

夏の百合

木曾高 81

助郷三代

冬木耀 109

走る

加部 進

139

須戸玲氏のバラ

高津慎一

179

病衣群像

新道真太郎

201

彷徨の果て

清水 昇

225

春宵一刻

大島 愛

273



鑑賞と解説

浅田晃彦

286

戦後小史

江口恭平

295

蛭

つ

田

萩

原

博

志

(昭和三十八年度)

ぎんはやかんをさげて、裏の山道を登ってゆく。山といつても、丘の南面で、両側は全部段々畑だ。墓地はその中腹にある。一枚一枚の桑畑を支えている土手は、まだ枯れ芝だったが、その中にタンポポの黄色が浮いている。二、三日降りつづいた雨で、温気を持った土手は、彼女のほおを汗ばませた。明かるい空には、桑の芽が、緑の羽根を止まらせている。もうすぐ彼岸がやってくる……。

「間に合ってよかった」

と、つぶやき、長身の背をこめて胸突き八丁を登る。急がないのに額にも汗が浮いた。墓地は最後の急坂を登り切ると、見晴しの良いところに一トかたまりになってあった。本家と西ン家と東ン家の三軒でつくっている共同墓地だ。それに加えてもらった……と思ったのも僅か二年——えらいことが起こったものだ。父啓吉の墓を、今日あばかなければならないのだ。どうして、そんな破目が、ぎんの家を襲ったのか。

共同墓地には、ド真ン中に大椿があつて、それが空一杯の傘を広げている。死者の血を吸って太りに太ったこの椿は、老木とは見えない。若者のように肌を油ぎり、葉もつやつやと光った。ぎんの眼に、そのかざした花が

わっと追った。今年は特別多く花がついた。啓吉の血が、ボツボツ椿の体内に流れ始めている。死者の魂は花の精となり、蜜が生まれ、蜂が群がり……だから、蜂は死者とつながって、経を唱える。——そのうなり声が、椿の花がさの中で、しきりに、わきあがっていた。

ぎんは、墓地に散り敷いた椿を草履で踏み、啓吉の墓の方へスタスタ近づいた。その一つだけとび出した墓の上にも、大椿ののびした枝が、花の塊りを燃やしている。いかにも貼りつけたという感じの小さな孤独な父の墓だ。ぎんは手をのばして、曲った塔婆を直した。

「彰覚啓道居士」——と、雨ににじんではいるが、まだよく読みとれる。裏には享年七十三才。昭和××年十二月二十日と死んだ日を書いてある。父の丸い顔が浮かんだ。

「お父つっあん。ばかを見たのう……本家が、ムゴイことをしたから、こんなことになって……勘弁してくんな！」

彼女の眼には、すぐ涙がふくらんだ。気丈で、単純な頭は、うすまぐ感情で一杯になる。

「人間のやることじゃねえやの。お墓を掘り返すなんて……村始まって以来のことを、本家ン家はさせやがっ

たんだよ。お父つつあんも、草葉のかげからよく見ていて、分かっているなあ！」

ぎんは、白木の膳の上のものを少し片づける。めしわんとするわんには、からすの突ついた後に、雨水がたまっていた。彼女はそれを一ト息に飲むとまた片づけた。

「もうちつとの辛抱だから、我慢してくんな。こんどは、誰にも動かされねえ、いいお墓が見つかったからなあ……」

墓前の水を飲んだので、自分の気持ちがいっしょかり、地下の啓吉に伝わった気がした。

ぎんは、塔婆の上からやかんの水を注いだ。その水はまるで、塔婆の下から、死者の口まで管が通っているように、いくら注いでも飲みこんだ。父の特別高かったのだ仏が鳴っている。ぎんは線香の紙をはぐと、マッチをすった。煙が椿の花に届き、蜂たちの読経はまた高まった。

「それじゃ片づけるからのう……」

と、最後に言つて、彼女は塔婆を抜き、膳をのけた。土まんじゅうのカサは、二年前より低くなっている。そのとき、ふもとの方から声が聞こえてきた。墓掘り人夫が登ってきたのである。人夫といっても、夫の由造と、養

子の仲夫、それに東シ家の八郎だった。もう一人は村の巡査で、これは今日の立会いに来なければならない義務があった。初めから、本家に助っ人を頼む気はなかった。それにしても、八郎の声が聞こえると、ぎんは嬉しかった。自分の方にも、本家の方にも両方とも親戚である八郎が、自分の方に味方してくれている、はつきりした証拠だったからだ。

四人の頭はすぐに墓地へ上ってきた。シャベルやモッコ、青竹や細引き綱などをてんでに持っていた。その一番後から、佐久間巡査は浮かぬ顔で登ってきた。

「今日はまた、えらいことで……叔父さんもばかを見たのう……」

と、八郎がぎんに形ばかりに言い、すぐ啓吉の墓に手を合わせた。しかし、彼はむぎんに扱われる仏に同情するといふよりも、自分の今日の行動を墓前に納得させたのである。

「こんなムゴイことに、おれはやっぱり同情しないではいられねえ。いくら、片つ方の親類だけに手を貸したって、村では誰も非難しねえだんべ……」

彼は本当は、本家との関係の方が、血のつながりは濃いのだ。彼の亡父が、そこからムコに來たものだからだ。

そして、分家の方は祖父の妹が、そこに嫁したものだからだ。だが、分家の方とのつき合いが、いつの間にか強くなっていた。本家の後をとっている草吉の方は、実の叔父でありながら、お人よしで、その上、口下手である。反対に分家の方は、ぎんの養子になった由造が、万事如才なく、利口者だったから、いつか村の信用も高まっていた。由造も草吉もともに働き者だったが、由造の方は頭を働かせて仕事をした。株なども堅いところを持ってゐる。高原野菜やしいたけの栽培、わさび田などをつくり始めたのも、由造が村では最初だった。こういう由造に、八郎はよく相談にやってくる。ほとんど由造の意見を聞きに来るのだが、いわば由造は父のない八郎にとって大樹のかげだった。だから、今日の墓掘り人夫も、どうやらこのへんに、意味がないことはない。

「それじゃ、ぼつぼつ始めてもらうかのう……」

と、由造が誰にともなく言つてシヤベルを取った。佐久間巡査は、村にもう十数年も住んでいる。どこと、どこの家の仲が良いか悪いかぐらいのことはつかんでいる。ずいぶん、そんなもめごとで身の上相談にも乗ってきた。しかし、こんな事件は初めてである。

彼は、分家の由造からも本家の草吉からもその話は聞

いていた。両方の言い分を総合して、彼は彼なりに解釈していた。

「事件は異常だが元を正せばただ、小つづけな欲であり、それに感情がからんで、どうにももつれてしまっただけなのだ……そんな悪人はいないんだが……」

その感情のもつれの中に、佐久間巡査はもう身を置きたくはなかった。停年の日が近づいている。この短かい月日に、こんな家のこんぐらかつた感情の青い炎を消し止める気持ちはない……。

彼はいまのことだけをとりえて身を処してゆけば良い……と決めた。墓はすでに新墓地が決まっている。死体を掘り出しても捨てるものではないから、ただ立ち会いだけを済ませればよいのである。それにしても、困ったことだ……と、彼はいまも腕組みをしている。分家、本家の話し合いをする時機は、すでに過ぎていた。

「裁判問題にでもならなさいが……」——そういうことに、関わりたくはない。

その眼に椿の花はいよいよ暗く咲き、不吉な色を盛っている。別段墓掘りの手許を見ている必要はなかった。

墓地の外れに立ち、村を見下ろしてみた。村は屋根だけしか見えなかった。浅間山のすそが割れて、二つの丘陵

となる、その間にはりついた三十戸ばかりの妻里村である。丘陵の間にはさまり、帯のような谷津田がチラリとのぞかれた。

「一番の原因となった「蛭っ田」もあそこにある……」佐久間巡査は眼を移した。屋根の大きい家ばかりだ。こんな山深い部落でありながら、テレビ塔の無い家はほとんどない。生活はわりに豊かであることを彼は知っていた。だが、どこかの屋根を突くと、ドロ、ドロ、うみの吹き出しそうなことも知っていた。表面、繕いに繕って家のため、村のため、親類のため……と、すべてを妥協と忍従で送ってきた世界がそこにある。墓掘り作業は、巡査の後ろで順調に進んでいた。時たま声があがった。

「ピンチャンの根が出てきやがった。のこぎりをちょつと貸してくんろ！」

椿は、この辺でピンチャンと呼ばれていた。巡査は、椿が大咲きをする前後の年は、必ず死人が出るものだということを思い出した。椿の体力が衰えるから、人間に死んでもらわなければ、栄養失調になるのだった。そう思うと、なるほど啓吉の死んだ意味もわかる気がした。ばつばつ、その肥やしになるところだったのに、椿の当

ては外れた。佐久間巡査は乾いた声でカラカラと笑った。浅間砂の堆積した墓地は、間もなく穴が掘り上げられた。埋葬して二年だが、別に踏み固めたわけではなかったから、土も柔らかかった。啓吉の棺桶に、最初シヤベルを当てたのは、やはり由造だった。その音の工合で腐りはまだ入っていないことが分かった。ぎんが穴の上から黄色い声を落とした。

「その分じゃ、中もまだ傷んじやいねえよ。きつと、お父つつあん、普通の顔してるよ！」

「そうとも、今から、奥さんに会っただもの。キレイになつて行かなきゃ困らい！」

と、八郎が答えてみな笑った。穴を掘りながら、由造が考え出したものだった。

「お父つつあんが満足な体だったら、おっ母さんに会わせべえじゃねえか！」

この大変なばかりいはいは、どうも佐久間巡査には素なおに受け取れなかった。

それは、中風で寝たきりのさに対するいたわりというよりも、その悲壮感と真実感を、本家に見せつけてやろうという、由造の底意が感じられたからだ。巡査は、どうか啓吉の死体が腐っていくるように——とひた

すら願った。しかし、寝棺の上の土を、全部取りのけても、棺のどこも傷んでいるところはなかった。その棺は普通よりはるかに大きかった。生前、六尺近い体で、やせてはいるが、啓吉は異常な力持ちだった。中年まで腕相撲をして誰にも負けたことはない。その力で、彼は今日の、本家をしのぐ分家にまで仕上げたのである。体が良かったから、兵隊にも取られ、日露戦争に出て負傷していた。傷は左腕にあった。彼のその年金も、分家の財をふやすのに一ト役買った。彼はこうして固い地盤を築き、七十も過ぎて死んだのだから、まあ幸せな人生と言うべきであった。ただ、娘のぎんと、由造との間に子がいなかったのは残念だったが、嫁に呉れた四女のところから男の子を孫養子にしたので、血は十分つながったわけである。更にその嫁を見るまで……と、口に出したりしたが、それは適わなかった。彼の死因は胃ガンである。年齢でもあるからと、親族たちは手術のことで協議したが、本人は胃潰瘍と思っているので、手術を主張し台の上に載った。が、一年目に死んだ。ガンは、本家譲りのもので、兄の草十もそれで死んでいた。啓吉は、このように家の安泰に満足はしていたが、先のことを忘れていた。一つ、大事なことを取り落としていたのである。そ

れは、分家の墓地进行しく築くことであった。分家して、五十年近く、彼の家には死者は出なかったのである。彼がもし生前に、自分の入る穴のことを用意しておいたならば、本家と分家の争いも起こらなかったかも知れないし、起こったとしても、やけどぐらいで済んだかも知れない。……

食物が納まらず、ミイラのようになって死んだ啓吉の棺は、大きいけれども、葬式の日には軽かったと同じように、いまも軽かった。二つの細引き縄がかけられ、四人が四方から持ち上げた。その一つを持ったのはぎんであった。しかし、棺は地表近くまでは上がるが、その先がどうもうまくゆかなかった。二度も元へ戻す作業をつづけ、三度目に、もう一本細引き縄をかけて、上の椿の枝につるした。さて、この作業は巡査にも頼む外はなかった。

「すまねえが、ちよっと手を貸してくんな……」

と、由造が言った。巡査は洪々ながら、服を脱ぐとその端を持った。

「ヨイシヨ、オイシヨ、もうちつとだ、佐久間さん、ぐつと引っぱって！」

佐久間巡査は因果なことに腰を落とすようにして、綱

の先を引いた。そのたび、椿の花が棺の上にも、巡査の帽子の上にもこぼれた。用意してきた青竹を二本棺の下に、うまく挿しこむと、この作業は終わった。佐久間巡査は気が抜けたように尻餅をついた。

啓吉の棺が上ると、由造はシャベルの先で、棺の一枚の板をこじ開けて中をのぞいた。別段悪臭は出なかった。二枚三枚とこじ開けると、中から啓吉の丸い顔が出てきた。どんなに形相が変わっているかと思つたのに、顔も手も、そして着物もほとんど傷んではいなかった。カタビラの胸に、啓吉の勲章がまだ光っている。眼窩（がんか）はくぼみ、黒い土色となっているが、深く眠つていと思えぬことはない。鼻に詰めた脱脂綿の色も変色してはいなかった。椿の根は、どうやら、まだ啓吉の血を吸うまでに食指を動かさなかったらしい。

「これなら、おばあさんに面会させられるぜ……」  
と、孫養子の仲夫が、派手な声をあげた。

後始末をすると、棺は由造と仲夫にかつがれて畑の細道を下つていった。ギシ、ギシ……棺は軽くとも、青竹の下でよく鳴つた。八郎はシャベルをジャラジャラ杖に突きながら、山伏のようについていった。その後から、塔婆を下げたぎんの青白い顔がつづいた。顔の丸いこと

も、背の高いことも彼女は父親にそっくりであつた。ふと、その眼がにらんだ。本家の屋根……

「ここまでばかりにされて、誰が田ンばなんか返すもんか！」

彼女は、父の悲鳴を聞きながら、とうとう言つた。さらに、その後からは、これになるべくかわりを持ちたくないと思つた佐久間巡査が、あたりの景色など眺めるふりをしてゆつくりとついていった。どこかでうぐいすが鳴いている。……

平和と見える山村に、こんな異常な事態を引き起こさねばならなかったのは、勿論感情のもつれが、それは乱麻というほどになったのが原因だつた。だが、そのもつと奥を搜すと、さつきぎんが覚悟のように言つた、田ンばが原因である。その田は、豊年でも三俵が積の山で、冷害の年など二俵を割つた。七畝ばかりの湿田で、村の人は呼んで「蛭っ田」と言つた。西に竹やぶが迫り、谷津田のドンくばで、排水はこの上なく悪かつた。一番乾く秋から冬にかけても、ジメジメとしていて、冬は刈り株を取り巻いて氷が張る。勿論、麦は作れない一毛作の田だつた。谷津田のことだから、多分、畝歩はのびて一反歩近くはあるかも知れないのに、米三俵……。ただ、



蛭だけがうようよ育ち、春から夏にかけては、田ンぼの水面を黒くした。蛭は、田植えの女達の足にからみ、太ももまではい上って陰部をつかがった。田の草取りのときには、すっかり成長した蛭達は、太ももに接ふんして離れず、ために体を干切られるのもあった。そして、女達の悲鳴がよく聞かれた。こんな蛭つ田を、啓吉は凡そ五十年作ってきたのである。……それを、本家の草吉が返せと迫るのであった……。

啓吉の棺は、本家の庭先を通り、分家の道を登ってきつた。本家の眼と耳が生け垣の向うからそがれていると思つ彼等は、「ヨイショ、オラショ！」と一ト声調子を上げて、分家の庭に運びこんだ。さとは、障子を開け放つてこれを見ていた。いや、表を通るのを見送るつもりでいたのだ。棺はそのまま通り越して、新墓地の方へ行くと思つていた。が、それが家の庭まで運びこまれてくると知ると、すぐその意味がわかつて胸が踊った。夢にも思わなかったことが、もう一度実現される……由造のその親切が嬉しかった。下半身麻痺で、身の動きはできなかったから、縁側までは出られないにしても、夫の二年ぶりの顔が見られるのだ。そして彼女は、二年後の、その自分の顔をそこに想像したかった。

早く寿命が来ないかな——それがさとの念願である。大・小の下の世話になるのに、実の娘のぎんだから気兼ねはいらなかったが、もう世の中が退屈であった。孫養子の伸夫が、以前はよく悪たれ口をたたいて、嫁が仲々取れぬ機げんさから、

「おばあさん、いつまで生きる気なんだい。病人がいる家に嫁は来ねえよ！」

などと言つたものだが、嫁が来たいまは、すっかりおとなしくなつてしまつて張り合いもない。

「ばか言つてねえぞ。この家をこれまでにしたんは誰だ。ちつとは考えてものを言え！」

そんな風にしかりつけたのも、もう昔だ。そのときはまだ生きる張り合いがあつた。こんなやぐざな孫養子をして困つたもんだ……そういう、後のことを心配する張りもあつた。だが、いまはみんなよくしてくれる。退屈な毎日だ。新聞や雑誌はすみからすみまで読む。テレビもよく見る。だが、忙しい野らにみんな出てゆけば、人の声は聞こえない。話も出来ない。

へいくらゼイタクをしていても、やつぱり人と一緒になけりや、人間というものは生きる張り合いがねえ……